HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達（3）：西ゲルマン語（2）
Author(s)	清水，誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要，159，45(左)-80(左)
Issue Date	2019-12-27
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.159.l45
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76544
Type	departmental bulletin paper
File Information	159_07_Shimizu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 159 （2019）

ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達（3）
── 西ゲルマン語（2）──

清　水　　誠

On the Historical Development of Adjectival Inflection in the Germanic Languages (3) — West Germanic (2)—
(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 159.
Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.
Sapporo/Japan. 2019. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

16. 低地ドイツ語の形容詞変化―有語尾形とゼロ語尾形の併存と高地ドイツ語の影響[99]

北海ゲルマン語にさかのぼる英語，フリジア語，低地ドイツ語，オランダ北東部のオランダ語北低地ザクセン方言（オ Nedersaksisch）では，残りの西ゲルマン語が属する現代の内陸ゲルマン語（英 Continental Germanic）に比べて，概して形態的簡素化が進行している。これは形容詞変化でも同様である。ただし，第 6 節で述べたように，形容詞が比較変化（英 comparison）を

[99] 本稿は清水（2018）（2019a）の続編であり，全体の完結編にあたる。参考文献は初出のものに限って示す。略語の追加は次のとおり。中英：中英語，ﾌｪﾘ：北フリジア語フェリング方言，モ：北フリジア語モーリング方言

10.14943/bfhhs.159.l45

除いて完全に語尾を失った現代ゲルマン語は，英語以外に存在しない。

限定用法の形容詞に有語尾形とゼロ語尾形が併存する例として，低地ドイツ語（ド Niederdeutsch）がある。低地ドイツ語はドイツ語圏北部の諸方言の総称で，西低地ドイツ語（ド Westniederdeutsch）と東低地ドイツ語（ド Ostniederdeutsch）に大別される。前者は古ザクセン語の後裔であり，後者は 12〜13 世紀に規模を拡大した東方植民（ド Ostkolonisation）による諸方言の混成と平均化を経て誕生した。西低地ドイツ語から北低地ザクセン方言（ド Nordniedersächsisch）の例を変化表にまとめてみよう（groot/grot- [o:]（ド *groß*/英 *great(=tall)*），不定冠詞 en（en）= en/enen，定冠詞 d-）[100]。

強変化	ある大柄な男（男性）	ある大柄な女（女性）	ある大柄な子供（中性）
単数　主格	en grot***en***[101]/groot-***Ø***	en[102] grot***e***/groot-***Ø***	en groo***t***（←-***t***）/groot-***Ø***
	Keerl	Fro	Kind
			↔無冠詞＋groot-***Ø*** Kind
目的格	en（en） grot***en***/groot-***Ø***	en grot***e***/groot-***Ø***	en groo***t***（←-***t***）/groot-***Ø***
	Keerl	Fro	Kind
			↔無冠詞＋groot-***Ø*** Kind
複数　主・目的格	grot***e***/groot-***Ø***	grot***e***/groot-***Ø***	grot***e***/groot-***Ø***
	Keerls	Froens	Kinner

[100] この表は Thies（2010²: 187–189）に準じている。ただし，注 101，102 に示すように，7 つの下位方言（Thies 2010²: 30）を含む北低地ザクセン方言の記述には異同がある。

[101] 強変化男性単数主格語尾について，Thies（2010²: 187–189）では，-er が衰退して目的格起源の -en に置換され，シュレースヴィヒなどでは主格・目的格ともに -e を用いるとしている。これに対して，Lindow et al.（1998: 191）は -Ø/-e/-en/-er と記して，-er は衰退しつつあり，-e が最も多く，一般的語尾とみなせると述べている。さらに，Lindow（1998⁵: 282）では -en のみ，Goltz/Walker（1990: 45）では -e/-en に -r を加えている。

[102] 不定冠詞女性単数形について，Thies（2010²: 153）では主格と目的格で en のほかに ene と 'n/'ne を併記している。Goltz/Walker（1990: 46）は een（e）とし，Lindow et al.（1998: 152）は en，ne としている。一方，Lindow（1998⁵: 282）は主格 en（e）↔目的格（対格）en として区別している。

弱変化		その大柄な男（男性）	その大柄な女（女性）	その大柄な子供（中性）
単数	主格	de grot***e***/groot-***Ø***	de grot***e***/groot-***Ø***	dat grot***e***/groot-***Ø***
		Keerl	Fro	Kind
	目的格	den grot***en***/groot-***Ø***	de grot***e***/groot-***Ø***	dat grot***e***/groot-***Ø***
		Keerl	Fro	Kind
複数	主・目的格	de grot***en***/groot-***Ø***	de grot***en***/groot-***Ø***	de grot***en***/groot-***Ø***
		Keerls	Froens	Kinner

強変化中性単数では，「不定冠詞＋形容詞 -(e)t/-Ø」↔「無冠詞＋形容詞 -Ø」の区別があるが，それ以外は，不定冠詞の有無による形容詞の語形に異同はない。所有代名詞を伴う場合にも，形容詞は強変化する。中性単数主・目的格 en groo***t*** Kind（ド *ein groß**es** Kind*）は，語尾 -t を伴う変化形であり（ザ groo***t*** ← groot-***t***），語末音が -t 以外の語は語尾 -(e)t を伴う（ザ en dösig***(e)t*** Kind「あるのろまの子」，ド *ein dösig**es** Kind*）。ゼロ語尾（-Ø）を除けば，強変化語尾は -en [ən]/-e [ə]/-t [t]〜-(e)t [(ə)t] の 3 種類，弱変化語尾は標準ドイツ語と同じく -e [ə]/-en [ən] の 2 種類である。

低地ザクセン方言では属格が消滅している。対格と与格は目的格（統一目的格，ド Einheitsobjektkasus/einheitlicher Objektkasus（Niebaum 1983[2]: 161））に融合し，主格との区別は男性単数にしか残っていない[103]。強変化では，第 11 節で述べたルクセンブルク語などと同様に，対格形が主格形に及んでおり（Niebaum 1983[2]: 161，Schirmunski 2010 (1962): 529），男性単数主格 en grot***en*** Keerl（↔ド *ein groß**er** Mann*）の形容詞語尾 -en は，かつての対格 -en（ド *einen groß**en** Mann*）に由来する。したがって，不定冠詞男性単数目的格 en(en)（＝en/enen，ド *einen*）がゼロ語尾の en で現れると，主格と目的格は同形となり，両者の区別は弱変化の定冠詞（ザ　主格 d***e*** grot***e*** Keerl↔目的格 d***en*** grot***en*** Keerl）にしか残らない。

さて，北低地ザクセン方言では，今までのどの言語とも異なって，有語尾

[103] 定冠詞にまったく格の区別がないドイツ語方言は稀である（Panzer 1983: 1172）。

-e/-en/-t～-(e)t とゼロ語尾 -Ø が併存している。ゼロ語尾形の使用は男性と女性では比較的少ないが，中性ではかなり頻繁である（Thies 2010[2]: 189）。

ただし，有語尾形には別のパターンがある。次表に示すように，音素のレベルで有声の閉鎖音 -d /d/ が音節末の無声化（英 final devoicing）によって無声の -t [t] で現れる形容詞 goot-（英 *good*）では，語尾 -e [ə] が先行子音に吸収されることがある。そして，その代償延長として，good の長母音 oo は超過長音（ド Überlänge）と呼ばれる現象によって，通常の長母音よりも音声学的に長くなる[104]。つまり，音素のレベルで有声の先行子音は，例外的に音節末音の無声化を妨げられて，有声音のままで現れる。語尾 -e/-en/-(e)t が音声的に実現されない点で，表面的にはゼロ語尾形に似ている（goo***t-Ø*** [t]（/d/）ゼロ語尾↔goo***d*** [d]（/d/）「語尾 -e の吸収＋超過長音」← good-***e***）。

強変化	ある良い男（男性）	ある良い女（女性）	ある良い子供（中性）
単数　主格	en god***en***～goo***d***/	en god***e***～goo***d***/	en god***et***～goo***d***/
	goot-***Ø*** Keerl	goot-***Ø*** Fro	goot-***Ø*** Kind
			無冠詞＋goot-***Ø*** Kind
目的格	en(en) god***en***～goo***d***/	en god***e***～goo***d***/	en god***et***～goo***d***/
	goot-***Ø*** Keerl	goot-***Ø*** Fro	goot-***Ø*** Kind
			無冠詞＋goot-***Ø*** Kind
複数　主・目的格	god***e***～goo***d***/	god***e***～goo***d***/	god***e***～goo***d***/
	goot-***Ø*** Keerls	goot-***Ø*** Froens	goot-***Ø*** Kinner
弱変化	その良い男（男性）	その良い女（女性）	その良い子供（中性）
単数　主格	de god***e***～goo***d***/	de god***e***～goo***d***/	dat god***e***～goo***d***/
	goot-***Ø*** Keerl	goot-***Ø*** Fro	goot-***Ø*** Kind
目的格	den god***en***～goo***d***/	de god***e***～goo***d***/	dat god***e***～goo***d***/

[104] 超過長音は音韻的対立を伴わない音声学的な現象である（Goltz/Walker 1990: 43）。名詞の複数形でも見られる（ザ Broo***t-Ø*** [t]/Da***g-Ø*** [x]/Bree***f-Ø*** [f]（ド *Brot*「パン」/*Tag*「日」/*Brief*「手紙」）↔複数形：ザ Bröö***d*** [d]/Daa***g*** [ɣ]/Bree***v*** [v]「語尾 -e の吸収＋超過長音」←古形 Bröde/Dage/Breve（ド *Brote/Tage/Briefe*），Thies 2010[2]: 146）。

		goot-***Ø*** Keerl	goot-***Ø*** Fro	goot-***Ø*** Kind
複数	主・目的格	de god***en***～goo***d***/	de god***en***～goo***d***/	de god***en***～goo***d***/
		goot-***Ø*** Keerls	goot-***Ø*** Froens	goot-***Ø*** Kinner

①に示すように，このパターンは /d/ が音節末の無声化を経た［t］を含む子音群 -nd/-lt で終わる語でも見られる。その際，語尾の付加とともに最後の子音が脱落し，語幹が交替する（Thies 2010[2]: 190f. 315f. ; Lindow et al. 1998: 191；ザ bli***nd***［blɪnt］～bli***nn***-「盲目の」/oo***lt***～oo***l***-「古い，老いた」/koo***lt***～koo***l***-「冷たい」，英 *blind/old/cold*）。これは軟音化（英 lenition）と先行する歯茎音への同化であり，比較級 -er でも起こる（oo***lt*** ― ö***ll***er ― ö***ll***st，英 *old* ― *older* ― *oldest*；koo***lt*** ― kö***l***er ― köö***l***st，英 *cold* ― *colder* ― *coldest*）[105]。

①	ザ	en	{***blinnen***/***blinn***}	Keerl	ド	ein blind***er***	Mann
		a	blind	man			
	ザ	de	{***ole***/***ool***}	Fro	ド	die alt***e***	Frau
		the	old	woman			
	ザ	iesig	{***koolt-Ø***/***kolet***}	Water	ド	eisig kalt***es***	Wasser
		icy	cold	water			（Thies 2010[2]: 315f.）

また，②に示すように，-(e)n［(ə)n］で終わる現在分詞と強変化動詞の過去分詞も，限定用法ではゼロ語尾である。このように，北低地ザクセン方言では，分詞を含めた限定用法の形容詞にゼロ語尾形の併存が少なくない。

②	現在分詞	ザ	de	fallen-***Ø***	Temperatur	（←不定詞 fallen）
			the	falling	temperature	（fall）

[105] 低地ドイツ語の北部に隣接するデンマーク語と北フリジア語（モーリング方言／フェリング方言など）にも，類似の現象が見られる（デ blind［blen?］/なし/kald［ɡʰal?］，モ blin/üülj/kölj～koule，ﾌｪﾘ blinj/ual/kul）。

		mit	fallen-***Ø***	Temperaturen	
		with	falling	temperatures	
	ド	die	fallend***e***	Temperatur	（fallen）
		mit	fallend***en***	Temperaturen	（ib. 191）
過去分詞	ザ	{fullen-***Ø***/	för de fullen-***Ø***}	Soldaten	
		{fallen/	for the fallen}	soldiers	
	ド	{gefallen***e***/	für die gefallen***en***}	Soldaten	（ib. 191）

さて，上述のように，北低地ザクセン方言のゼロ語尾形は中性で多用する。とくに無冠詞の場合には，単数では 3 性ともゼロ語尾形が一般的である（Lindow et al. 1998: 192）。東低地ドイツ語の代表的なメクレンブルク・フォーアポマーン方言（ド Mecklenburgisch-Vorpommersch）では，ゼロ語尾形は中性に加えて，女性でも多用され（メ dat oll***(e)*** Hus「その古い家（中性）」，de lütt***(e)*** Diern「その小さな女の子（女性）」），無冠詞の場合には，単数では 3 性ともゼロ語尾形だけを用いる（ザ Ø olt-***Ø*** Puchert「プハート翁（男性）」（ド *der alte Puchert*，Herrmann-Winter 2006: 39f.）。このように，低地ドイツ語では，名詞変化を受け継いだ古い時代のゼロ語尾形のほうが，後代の発達による有語尾形よりも一般的なケースが散見される。

低地ドイツ語のゼロ語尾形は英語と共通し，有語尾形は標準ドイツ語と共通している。両者の併存は何を意味しているのだろうか。結論を先取りすれば，無語尾形は北海ゲルマン語的特徴としての名詞変化の継承であり，有語尾形は標準ドイツ語の基盤となった高地ドイツ語の影響による導入である。

清水（2018：46–48）の付表 1 および注 47 に示したように，西ゲルマン語の古語である古ザクセン語，古英語，古高ドイツ語の形容詞強変化男・女・中性単数主格（および中性対格）の語尾は次のようになる。

		古ザクセン語	古英語	古高ドイツ語
単数主格	男性	-Ø	-Ø	-Ø/-ēr
主格	女性	-Ø	-Ø/-u	-Ø/-iu

主・対格　中性　-Ø　　-Ø　　-Ø/-az

低地ドイツ語の前身である古ザクセン語では，形容詞強変化男・女・中性単数主格（および中性対格）には有語尾形がなく，ゼロ語尾形が支配的だった（古ザ　男性 blind-***Ø***/女性 blind-***Ø***/中性 blind-***Ø***）。同じく北海ゲルマン語に属する古英語でも，短語幹 1 音節形容詞および多音節複合語形容詞の強変化単数女性形では有語尾形 -u だが，それ以外はゼロ語尾形のみである（古英男性 blind-***Ø***/女性 blind-***Ø*** ~ hwat***u***/hālig***u*** ← hwæt/hālig（英 *active/holy*）/中性 blind-***Ø***）。このゼロ語尾形は，北海ゲルマン語的特徴（ド Ingwäonismen）の一例として知られている（Schirmunski 2010（1962）: 528）[106]。

一方，内陸ゲルマン語に属する古高ドイツ語では，ゼロ語尾形と有語尾形が併存していた（古高ド blint***(ēr)***/blint***(iu)***/blint***(az)***）。代名詞変化由来の有語尾形は，すでに述べたように，比較的新しい。「形容詞＋名詞」の語順では有語尾形とゼロ語尾形が現れたが，「名詞＋形容詞」の語順では有語尾形が衰退して，ゼロ語尾形が支配的になった。中高ドイツ語や低地フランケン方言を基盤とした中期オランダ語でも，この傾向が強かった（Van Royen 1995: 60f. , Van Kerckvoorde 1993: 58）。一般にドイツ語圏では，中世の最初期から，限定用法の有語尾形は南部に特徴的であり，北部に移るにつれてゼロ語尾形が多くなる。現代の方言分布でも同様である（Dal/Eroms 2014[4]: 66f.）。

注 100～102 で述べたように，北低地ザクセン方言は 7 方言を含む広域方言の総称であり，類書によって記述に異同がある。上の変化表では割愛したが，たとえば Lindow et al.（1998: 191）は，不定で定冠詞を欠く場合に，強変化男性単数主格として 3 種類の語尾 -e/-en/-er を認めている（ザ {dick-***Ø***/dick***e***/dick***en***/dick***er***} Kopp「鈍感な頭（＝厚い頭）」）。Goltz/Walker（1990:

[106] „Zum Unterschied vom Hochdeutschen kannten die Adjektive im Ingwäonischen keine differenzierten Pronominalendungen im Nom. Sing. Mask., Fem. und Neutr.（ahd. Mask. *-ēr*, Fem. *-iu*, Neutr. *-az*）. Der Nominativ hatte eine Einheitsform（ursprünglich eine Nominalform）, die der sogenannten undeklinierten Form des Hochdeutschen entsprach: and. *gōd*.“（Schirmunski 2010（1962）: 528）

45）も，不定冠詞付き・所有代名詞付き・無冠詞の場合に，強変化男性単数主格として3種類の語尾 -e/-er/-en を記している（ザ lütt***e(r/n)***「小さな」）。この中の -e は，デンマーク語と同様に語末音 -n の脱落が進行したシュレースヴィヒ（ド Schleswig，南部を除く）を中心に，東フリースラント（ド Ostfriesland）やエルベ川東部（ド Ostelbien）でも見られる（Thies 2010[2]: 188）。

上記の低地ドイツ語の有語尾形は，新高ドイツ語（ド Neuhochdeutsch, 1650〜）の影響で（„unter hochdeutschem Einfluß“, Schirmunski 2010（1962）: 528）広まった。対格形の拡大による -en に対して，-er は高地ドイツ語を基盤とした標準ドイツ語の拡大に伴う影響で生じた（ただし，現在では衰退しつつある（Lindow et al. 1998: 191））。強変化中性単数主格・目的格の語尾 -et も，古い時代の高地ドイツ語（ド -es＜中高ド -ez）の影響による（Niebaum 1983[2]: 161, Schirmunski 2010（1962）: 528）。

一方，強変化中性単数形にゼロ語尾が多いのは，男・女性形よりも高地ドイツ語の影響を受けにくかった結果とされている（Lipold 1983: 1181）。西低地ドイツ語ヴェストファーレン方言（ド Westfälisch）でも，強変化語尾は単数で男性 -en/女性 -e/中性 -Ø であり，中性だけがかつての無変化形を保っている（Keller 1961: 318, Durrell 1990: 78）。Durrell（1990: 78）は同方言の形容詞語尾を次のようにまとめている。

強変化	単数：男性	女性	中性	複数（3性共通）
主・対・与格	-e	-e	-	-e
弱変化	単数：男性	女性	中性	複数（3性共通）
主格	-e	-e	-e	-n
対格	-en	-e	-e	-n
与格	-en	-e(n)	-e(n)	-n

さらに，東低地ドイツ語に属するメクレンブルク・フォーアポマーン方言では，強変化中性単数形として，ゼロ語尾形と並んで，有語尾形 -(e)t の代わりに，高地ドイツ語子音推移（ド Hochdeutsche Lautverschiebung，t＞s）を

経た借用語尾 -(e)s を用いる[107]。Schönfeld（1990: 110）は発音記号を用いて，同方言の形容詞語尾を次表にまとめている（-ə は文字では -e と表記する）。

強変化	単数：男性	女性	中性	複数（3性共通）
主格・目的格	-n	-ə	(-s)	-ə
弱変化	単数：男性	女性	中性	複数（3性共通）
主格	-ə	-ə	-ə	-n
目的格	-n	-ə	-ə	-n

Herrmann-Winter（2006）に収められたメクレンブルク・フォーアポマーン方言のテキストから例を挙げて，標準ドイツ語と比べてみよう。

① メ Ja, ik glöf dit Johr is woll'n ganz *schön**es*** Honnigjohr.
ド Ja, ich glaube, dieses Jahr ist wohl ein ganz *schön**es*** Honigjahr.
ああ，今年はたぶんとても良い蜜の取れる年になると私は思う
（Herrmann-Winter 2006: 76, 78）

② メ Wier gor kein *leicht**es*** Stück Arbeit, nich, œwer se hemm dat schafft.
ド Das war kein *leicht**es*** Stück Arbeit, nicht, aber sie haben es geschafft.
（それは）簡単な仕事じゃなかった，まったく，でも，彼らはそれをやり遂げた（ib. 119, 121）

北低地ザクセン方言についても，Lindow（1998[5]: 282）の形容詞変化表では，強変化中性単数の語尾を高地ドイツ語的な -(e)s（メ en wied***(es)*** Land「広

[107] Schönfeld（1990: 111）は，東低地ドイツ語では新高ドイツ語から借用したこの語尾 -s は少数の表現にしか現れないと述べている（"The neuter singular ending *-s* is borrowed from New High German and only occurs in a few phrases", ib. 111）。しかし，後出の Herrmann-Winter（2006）のテキストでは頻繁に登場する。

い土地」，ド *ein weit**es** Land*）とだけ記している。類書にはない記述だが，同方言の北部に位置するホルシュタイン地方（ド Holstein）のディトマルシェン（ド Dithmarschen）方言は，この語尾 -es を備えている（Schirmunski 2010（1960）: 528）。G. F. マイヤー（Gustav Friedrich Meyer 1878–1945）は，低地ドイツ語擁護の立場から書かれた古典的名著 Meyer（1983[2]（1923）: 82）の中で，低地ドイツ語文筆家による語尾 -es の使用は，本来，ゼロ語尾であるはずの「ホルシュタイン地方の低地ドイツ語の言語使用に反する」（„wider den holsteinischen Sprachgebrauch“, ib. 82）と記している。

興味深いのは，上述のメクレンブルク・フォーアポマーン方言を扱った Hermann-Winter（2006）には，比較級で本来の低地ドイツ語的な語尾 -et を示す例が見られる点である。

③　メ　Dat is ⟨åwer/œwer⟩ ’n *grot**(es)*** Hus.　それはしかし大きな（原級 grot***(es)***，ド *groß**es***）家だ（Hermann-Winter 2006: 169）
↔As hei mihr Geld ⟨har/her⟩, hett hei sik ’n *grötter**(et)*** Boot bugen låten.　彼にもっとお金があったら，彼はもっと大きな（比較級 grötter***(et)***，ド *größ**eres***）船を作らせただろう（ib.　159）

同書ではこの点に言及がない。私見では，使用頻度が低い比較級では原級との類推が及ばずに，低地ドイツ語的な語尾 -et が保たれることがあると考えられる。ここで想起されるのは，北ドイツの都市名 Hanno***v***er［haˈno:fɐ］「ハノーファー」/Je***v***er［ˈje:fɐ］「イェーファー」とその住民名 Hanno***v***eraner［hanovəˈra:nɐ］「ハノーファーの人」/Je***v***eraner［jevəˈra:nɐ］「イェーファーの人」に見られる摩擦音 v での無声［f］/有声［v］の交替である。以前は，ヴェアナーの法則（英 Verner’s law）の反映として，有アクセント音節の無声音［f］（英 o***ff***［ɔ(:)f］）が無アクセント音節では有声音［v］（英 o***f***［əv］）で現れる事実と関連づけて解釈した説があった。これに対して，Kuhn（1964）は，都市名 Hanno***v***er の無声音［f］は，17 世紀以降，標準ドイツ語の地位を強めた高地ドイツ語の使用地域で行われていたこの大都市名の発音が，例外

的に低地ドイツ語地域に浸透して，本来の低地ドイツ語的な母音間の有声摩擦音［v］を置換した結果であるとした。本来の高地ドイツ語では，母音間の摩擦音 v は無声音［f］として発音される。低地ドイツ語から借用した標準ドイツ語の Ha***f***en［f］「港」（ザ Ha***v***en［v］，英 ***ha v en***）の影響を受けて，北海沿岸の港湾都市 Bremerha***v***en/Cuxha***v***en/Wilhelmsha***v***en「ブレーマーハーフェン/ククスハーフェン/ヴィルヘルムスハーフェン」の v を無声音［f］で発音するのも同様である[108]。一方，高地ドイツ語では一般的でない接尾辞 -aner［ˈaːnɐ］による住民名 Hanno***v***eraner［v］の v［v］には類推が及ばず，Kle***v***e「クレーヴェ」/Tra***v***emünde「トラーヴェミュンデ」など，他の多くの北ドイツの地名と並んで，低地ドイツ語本来の有声音［v］が保持された。Je***v***er［f］↔Je***v***eraner［v］もこれにならった例である。このようにして，Kuhn（1964）は通説の誤謬を明快に正した。

名詞変化に由来する無語尾形を保持し，先行する歯茎子音の軟音化と語尾 -e の吸収を特徴とする低地ドイツ語は，ゲルマン語として類例を見ない英語の形容詞語尾の消滅に至る最終段階にあると言われることがある（„Dieser niederdeutsche Zustand ist die letzte Stufe vor Aufgabe der Adjektivendung, wie etwa im Englischen“, Lipold 1983: 1181）。しかし，低地ドイツ語の形容詞変化は，英語と違って，ゼロ語尾形のパターンに完全には移行しなかった。その第一の要因には，名詞の性の保持が挙げられるが，それと並んで，高地ドイツ語の影響も作用したと考えられる。

[108] 高地ドイツ語で w［w］>［v］の変化によって生まれた母音間の［v］（ド e***w***ig「永遠の」/Mö***w***e「カモメ」/Lö***w***e「ライオン」）は，少数例にとどまる。ただし，その後，ロマンス語などからの借用語の影響で，上記の原則にも混乱が生じた（Kuhn 1964: 16f.）。

17. オランダ語と西フリジア語語の形容詞変化―形態的簡素化の進展と統一語尾

オランダ語は，内陸ゲルマン語に属する低地フランケン方言を標準語の基盤としながらも，北海ゲルマン語にさかのぼる北東部の北低地ザクセン方言を含んでおり，低地ドイツ語との共通点も目立つ西ゲルマン語である。低地ドイツ語と同様に，オランダ語の形容詞強・弱変化は大幅な形態的簡素化を被った。ここでは，北西部に隣接する西フリジア語と併せて論じてみよう。

現代オランダ語では，人称代名詞を除いて格変化が消失している。オランダを中心とするオランダ語圏北部の標準語では，第 10 節で述べたスウェーデン語とデンマーク語と同じく，男性と女性が両性に融合している（goed [ɣu·t]（英 *good*），不定冠詞 een，定冠詞 de/het）。

強変化	ある良い男(両性) ～	ある良い女(両性)	ある良い子供(中性)
単数	een goed***e*** man	een goed***e*** vrouw	een goed-***Ø*** kind
複数	goed***e*** mannen	goed***e*** vrouwen	goed***e*** kinderen
弱変化	その良い男(両性) ～	その良い女(両性)	その良い子供(中性)
単数	de goed***e*** man	de goed***e*** vrouw	het goed***e*** kind
複数	de goed***e*** mannen	de goed***e*** vrouwen	de goed***e*** kinderen

限定用法の形容詞は，中性単数不定でゼロ語尾（-Ø），その他はすべて語尾 -e [ə] を示す。強・弱変化のなごりは，中性単数不定形（ゼロ語尾 -Ø）と定形（語尾 -e）で保たれているにすぎない。第 13 節で述べたように，中期オランダ語では，男・中性単数不定でゼロ語尾だった（die/dat 指示代名詞，huus/huis（英 *house*））。

男性単数主格	強変化	中期オ	een-***Ø***	goet-***Ø***	man	＞オ	een-***Ø***	goed***e***	man
	弱変化		d***ie***	goed***e***	man		de/die	goed***e***	man
中性単数主・対格	強変化	中期オ	een-***Ø***	goet-***Ø***	huus	＞オ	een-***Ø***	goed-***Ø***	huis
	弱変化		d***at***	goed***e***	huus		h***et***/d***at***	goed***e***	huis

現代オランダ語では，不定冠詞の有無による形容詞の語形に異同はない。中期オランダ語の語末音 -n は脱落し，形容詞語尾は -e のみである。オランダを中心とするオランダ語圏北部では，品詞の種類と無関係に -en [ə(n)] の -n が脱落する[109]。中期オランダ語の形容詞語尾 -en の -n は，現代オランダ語では限定用法で完全に脱落しており，独立用法の複数形で人間を表す -en [ə(n)] だけに保たれている（オ de goed***e***「良い物（複数形）」↔de goed***en*** [ˈɣu·də(n), ˈɣu·jə(n)]「良い人々」）。これは，第 11 節で述べた英語の「my＋名詞↔mine＋Ø」，「no＋名詞↔none＋Ø」の対立に似ている。

一般に西ゲルマン語の形容詞語尾は，「母音＋｛Ø/子音 r/s/t/m/n｝」から成っている。人称代名詞以外で格変化が衰退した現代オランダ語では，限定用法の形容詞は中性単数不定でゼロ語尾，有語尾形で -e [ə] に統一されている。大多数のドイツ語方言では，弱変化だけでも，形容詞の有語尾に 2 種類（-ə，-n）がある（Panzer 1983: 1173）。オランダ語のような強・弱変化を合わせて 1 種類の統一語尾（ド Einheitsendung）は稀である。シンタグマ表示も，中性単数不定ではゼロ語尾なので，一貫していない。オランダ語の形容詞変化は，形態的弁別にほとんど積極的な役割を果たしていない。

以上の点は，次表に示すように，北海ゲルマン語の後裔でオランダ語圏の北西側に隣接する西フリジア語でも同様である（goed [guət]（英 *good*），不定冠詞 in，定冠詞 de/it）。

[109] ベルギー・フランドル地方を中心とするオランダ語圏南部では，-en [ən]のように語末音 -n [n]を保つ傾向が強い。形容詞語尾 -e [ə]もオランダ語圏南部を中心に -en [ən]となる（稀にゼロ語尾，*MAND I*（2005: 73ff., Commentaar 58ff.）参照）。

強変化	ある良い男(両性)	～	ある良い女(両性)	ある良い子供(中性)
単数	in goed***e*** man		in goed***e*** frou	in goed-***Ø*** bern
複数	goed***e*** manlju		goed***e*** froulju	goed***e*** bern
弱変化	その良い男(両性)	～	その良い女(両性)	その良い子供(中性)
単数	de goed***e*** man		de goed***e*** frou	it goed***e*** bern
複数	de goed***e*** manlju		de goed***e*** froulju	de goed***e*** bern

不定冠詞の有無による形容詞の語形にも，異同はない。西フリジア語は隣接するオランダ語から強い影響を受けてきた。オランダ語との相違は，所有代名詞を伴う場合に限られる。すなわち，「所有代名詞＋形容詞＋名詞中性単数」では，オランダ語は形容詞語尾 -e（オ ons goed***e*** kind ← het kind，英 *our good child* ← *the child*）を示すが，西フリジア語ではかつてのゼロ語尾（西ｱ ús goed-***Ø*** bern ← it bern）である。西フリジア語でも，形容詞の語形変化は形態的弁別にほとんど役立っていないと言える。

18. 文法化，脱文法化，外適応

オランダ語との比較から，次節で扱うアフリカーンス語の理解に必要な表題にある歴史言語学の 3 つの概念について，ここで補説しておこう。

語彙項目が文法的機能を担う方向に歴史的に変化する「文法化」（英 grammaticalization）は，メイエ（Antoine Meillet 1866–1936）の命名に由来し，近年の歴史言語学でつとに重視されている。一方，それとは逆に，文法的形式が本来の文法的機能を失う「脱文法化」（英 degrammaticalization）も観察される。脱文法化は Lehmann（2015[3]（1982): 18–21）による 1982 年の造語だが，当時は存在しない現象とされていた。文法化は「語彙項目＞文法項目」という「一方向性」（英 unidirectionality）によって特徴づけられ，可逆的変化はあり得ないと考えられていたのである。

Lehmann（2015[3]（1982): 18–21）による脱文法化の概念は，事実上，「語彙化」（英 lexicalization）に限定されていた。端的な例としては，ドイツ語の 2

人称単数親称代名詞 du「君（など）」を含む動詞 duzen「君（など）で呼ぶ」，英語の capitalism「資本主義」/existentialism「実存主義」などの名詞派生接尾辞 -ism「～主義」を名詞化した ism「イズム，主義」などが挙げられる（Hopper/Traugott 2003[2]: 134, Norde 2009: 113）。しかし，これは語形成手段としての品詞転換（英 conversion）であって，文法化と逆のプロセスをたどった歴史言語学的変化の結果とは言いがたい。duzen の du- の指示対象は発話状況とは切り離されており，また，中間段階を経ずに動詞が人称代名詞，名詞が接尾辞へと直接的に変化する証拠も見られないからである。

脱文法化の定義は，この現象を初めて体系的に扱った Norde（2009: 120）で次のようになされている。

> 「脱文法化とは，特定の文脈での文法項目（英 gram）が複数の言語レベル（意味，形態，統語または音韻）において，より多くの自立性ないし実質を獲得する複合的な（＝複数の言語レベルの競合による）変化である」（“Degrammaticalization is a composite change whereby a gram in a specific context gains in autonomy or substance on more than one linguistic level (semantics, morphology, syntax, or phonology).” ib. 120）

この定義を簡潔に解説した Norde（2011: 476f.）によれば，文法化と脱文法化の相違は，方向性（英 directionality），頻度（英 frequency），連鎖現象（英 chain phenomenon）の 3 点にまとめられる。まず，方向性については，文法化が意味的摩滅，形態的合体，統語的固定化に向かうのに対して，脱文法化は意味的強化，形態的独立，統語的自由化をもたらす。次に，頻度については，文法化では脱文法化に対して頻繁に観察される。脱文法化が注目されにくかった理由のひとつは，具体例の少なさにある。一般に文法項目は特殊な範疇で，項目数が少ない閉じられた集合であり，意味的具体性と形態的独立性に乏しい。一方，語彙項目は主要な範疇で，項目数が多い開かれた集合であり，意味的具体性と形態的独立性が強い。文法項目が語彙項目に向かうためのは，他の数多くの項目と同様の具体的な意味的特徴と形態的特徴を備え

る必要があり，負担が重い変化の過程を経る必要がある。最後に，連鎖現象については，文法化は連鎖的に起こりやすいのに対して，脱文法化は連鎖的に起こりにくい。連鎖的文法化の一例には，「語彙的動詞＞助動詞＞接語的助動詞＞屈折接辞」という複数の文法化が継起的に起こるプロセスが挙げられる。たとえば，ゲルマン語の弱変化動詞を特徴づける歯音接尾辞（英 dental suffix，英 -ed/ド -te）が語彙的動詞である英 do/ド tun から，使役の助動詞や不定詞を話題化する代動詞を経て発達したとされるプロセスが想起されよう。脱文法化で連鎖現象が認めにくいのは，変化の方向性が有標（英 marked）であることにもよる。脱文法化では，上位の定義にあるように，「より多くの自立性ないし実質を獲得する」ことが求められるが，他の主要な範疇と同様の意味的・形態的特徴を獲得した後では，さらに上位の「自立性ないし実質の獲得」は想定しがたい。一方，これとは逆の方向に向かう文法化では，「自立性ないし実質の消失」は段階的に起こっても不自然ではない。文法化によって，そのつど特殊な範疇が形成されることは，他との範疇との比較をかならずしも前提としないからである。

しかし，「一方向性の仮説」（英 unidirectionality hypothesis）は絶対的ではなく，少ないながら，逆のケースも存在することが認識されるようになった。文法化を体系的に扱った Hopper/Traugott（2003[2]: 130–138）では，一方向性の仮説への例外について，1993 年の初版よりも多くの紙面で解説している。現在では，上述の Norde（2009）を筆頭として，脱文法化は語彙化とは別に，文法化と鏡像関係をなす特定の現象を指すと理解されるようになっている。清水（2018：16–19）でも，第 5 節で Szczepaniak（2011[2]: 62f.）を援用し，ドイツ語の男性弱変化名詞の発達をその一例に挙げた。ギヴォン（Talmy Givón）による有名なスローガン Today's morphology is yesterday's syntax. には，その対価として，Today's morphology is tommorow's syntax.（Janda 1980: 251）となる余地も残されていると言えよう。

さて，文法化された形式がさらに変化する可能性については，文法形式自体の消滅，共時的例外としての残存，脱文法化のほかに，本来の文法的機能が当初は予想されなかった別の機能に転じる場合がある。これが「外適応」

（英 exaptation）である。外適応は本来，進化生物学の用語であり，特定の機能を担っていた生物の形質がこれとは無関係な別の機能に転用される現象を指す。よく知られた例には，爬虫類（恐竜）の一種から進化した鳥が翼を用いて空を飛ぶに至った過程への説明がある。つまり，鳥は空を飛ぶための翼をゼロの段階から直接，獲得したのではなく，温血動物で高緯度地域に生息していた羽毛恐竜が体温調節手段として発達させていた羽毛を滑走手段，そして，空中飛行手段へと転用し，翼として進化させた結果とみなす考え方である。あるいは，脊椎動物が呼吸器や消化器の一部を音発生に利用し，類人猿などが意思疎通の手段に転用した過程も挙げられる。つまり，通常の単音の調音は肺からの呼気の排出，放出音（英 ejective）は閉じた声門を引き上げて口腔から唾や痰を吐く行為，吸着音（英 click）は軟口蓋への呼気の吸入による液体などを吸う行為と密接な関係にあるとみなす説である。

外適応の概念を言語学に適用した初期の試みとして，清水（2018：21）の第 6，7 節で言及した Lass（1990）がよく知られている。そこでは，ゲルマン語強変化動詞の母音交替（ド Ablaut）とアフリカーンス語の形容詞語尾 -e の例が援用されている。前者の趣旨をまとめると，ゲルマン祖語は印欧祖語のアスペクト組織を時制組織に転換したが，新たに誕生させた弱変化動詞では，語幹（＝語根＋語幹形成母音）に添えた歯音接尾辞[110] の導入によって，印欧祖語の語幹の母音交替による完了（英 perfect）とアオリスト（英 aorist）というアスペクトの対立は，ゲルマン祖語で過去時制に転換される過程で消滅した。歯音接尾辞の付加によって語幹が同一となり，母音交替による異形態が一掃されたためである。元来，印欧語の完了は，過去の出来事の結果として現在の状態を表し，アオリストは過去の出来事全体を時間的経過とは無関係に点的にとらえる。両者は継続的状態と瞬間的出来事というアスペクトの相違で対立するが，完了も出来事の生起が発話時から離れて先行する点では，過去の意味を併せ持っている。ゲルマン祖語は，その二次的意味を新た

[110] Lass（1990: 83）では「舌頂性子音（通常は閉鎖音）を含む接尾辞」（'a suffix containing a coronal（usually a stop））' としている。

に中心的意味に据えたと言える。一方，語幹母音の母音交替を保持した従来の強変化動詞では，印欧祖語の o-階梯による完了は，音韻変化の結果として，ゲルマン祖語では a-階梯による過去単数（印欧 *o＞ゲ *a），ゼロ階梯/延長階梯（ē）によるアオリストは，ゼロ階梯（_）/延長階梯（ē）による過去複数として，それぞれ踏襲された[111]。

印欧　e-階梯：現在（ギ λ**έ**ιπ-ω，英 *I leave*）
　　— o-階梯：完了（ギ λέ-λ**ο**ιπ-α）
　　—ゼロ階梯（_）/延長階梯（ē-）：アオリスト（ギ έ-λ_ιπ-ον/ラ **ē**d-ī ← ed-ō，英 *I ate* ← *I eat*）
＞ゲ　e-階梯：現在（ゴ gr**e**ipa（ゴ ei [i:]＜ゲ *e＋ǐ）/b**e**ra，英 *I grip/bear*）
　　— a-階梯：過去単数（ゴ gr**a**ip/b**a**r，英 *I gripped/bore*）
　　—ゼロ階梯（_）/延長階梯（ē-）：過去複数（ゴ gr_ip-um/b**ē**r-um，英 *we gripped/bore*）

これによって，アスペクトの対立は数の対立に転換され，古ゲルマン諸語の段階まで命脈を保った。現代ゲルマン諸語では，アイスランド語とフェーロー語を除いて，数の対立も類推によって，かつての単数・複数のどちらかの母音に統一されている（ア b**e**ra/b**e**r — b**a**r↔b**á**rum，ﾌｪ b**e**ra/b**e**r — b**a**r↔b**ó**ru（英 *b**ea**r/(I) b**ea**r* —(*I*) *b**o**re*～(*we*) *b**o**re*））。

後者のアフリカーンス語の例は，第 19 節で取り上げる。ただし，筆者の分析は Lass（1990）とは異なる。

上述の Norde（2009: 115–118）によれは，外適応は脱文法化と関連させて理解されることが多いが，脱文法化はつねに外適応を伴うわけではなく，す

[111] Lass（1990: 84）は，延長階梯 ē によるラテン語の完了 ēd-ī は古いアオリストにさかのぼるとみなしている。ただし，Buck（1933: 292）にあるように，ゲルマン語強変化動詞第 IV，V 系列の過去複数にも現れる延長階梯 *ē の解釈には，古くから異論がある。

べての外適応が脱文法化に通じるとも限らない[112]。また，Lass（1990）と同じ頃，Greenberg（1991）は外適応と類似する現象を指して，「再文法化」（英 regrammaticalization）と呼んだ。Lass（1997: 318）も改めて述べているように，外適応は新たな文法化をもたらすことがある。しかし，上述のように，外適応は脱文法化と連想されるほうが多く，同一視はできない。外適応は本来の機能とは異質な新たな機能を生む変化であり，異形態を規則化し，結束性を高める類推（英 analogy）とは相反する点にも注意を要する（ib. 320）。

Lass（1990）に対する批判は，とりわけ “How to Do Things with Junk” というタイトルの「くず，無用のがらくた」（junk）という表現に向けられた。事実，外適応は本来の文法的機能が完全に失われ，形骸化した後でなされるとは限らない。Lass（1997: 318–324）ではこの点を修正し，「非くず・無用のがらくた」（non-junk），つまり「『有益な』（あるいは，少なくとも周辺的かつ衰退しつつあるわけではない）特徴」（‘useful’（or at least not marginal, decaying）features, ib. 318）による外適応（non-junk exaptation）の存在を認めている。前出の例に補足すれば，鳥の翼は依然として体温調節機能を保持しており，飛行手段への転用は本来の機能が失われて「くず，無用のがらくた」となった後に起こったと推定するのは，適切ではない。むしろ本来の形質の潜在的能力を発展させた，機能拡張の結果とみなすのがふさわしい。別の例として挙げた音発生と意思疎通手段への転用についても，本来の呼吸や消化の機能こそが，生物にとって必須の生命維持手段であることに変わりはない。これと同様に，外適応がなされる言語形式は，外適応の時点でも本来の機能を果たし続けており，それでもなお，併存する別の構造の一部として新たな機能を担うように再構築されることがあると言える[113]。

---

[112] “To conclude, degrammaticalization may involve exaptation, but not necessarily so, and not all cases of exaptation can be classified as degrammaticalizaiton. The two terms should therefore not be treated as synonyms.”（Norde 1990: 118）

[113] “In a typical case, the material exapted is at the point of exaptation doing something else（which it may continue to do）; but it is still capable of being remanufactured or restructured, and still exapted, in a sense, as a part of a different kind of coexisting

このように，外適応は文法化または脱文法化との関連で生じ，構造的要因が関係している。進化生物学の概念を言語学に持ち込もうとする試みには，過去には誤解を呼ぶ例もあった[114]。しかし，「文法化および脱文法化の過程で本来の文法的役割を予想外の別の役割に転じること」という意味で外適応という用語を用いる考え方に，問題はないと考えられる。外適応を多角的に扱った最初の論集には，Norde/Van de Velde（eds.）(2016）がある[115]。

19. アフリカーンス語の形容詞変化―統一語尾によるシンタグマ表示と外適応

前節の補説を受けて，最後の現代ゲルマン語の例としてアフリカーンス語を取り上げてみよう。1652 年のケープタウン入植後，オランダ語話者の子孫が現地の諸言語と接触し，独立の言語として誕生したアフリカーンス語では，形容詞変化がユニークな発達を遂げた。アフリカーンス語では，オランダ語，西フリジア語，低地ドイツ語のどれよりも形態的簡素化が進行しており，英語をもしのぐほどである。定動詞は人称語尾を失い，大多数の強変化動詞は母音交替，弱変化動詞は歯音接尾辞を廃したので，原則として語幹は同一である。過去形は消失しており，過去の出来事はもっぱら完了形で表す。

① 本来の強変化動詞：ｱﾌ drink/オ *drinken*/英 *drink*「飲む」

ｱﾌ drink—hy/ons drink—hy/ons het gedrink

オ *drinken—hij drinkt/wij drinken—\hij dronk/wij dronken ~ hij heeft gedronken/wij hebben gedronken*

英 *drink—he drinks/we drink—\he/we drank ~ he has/we have drunk*

---

structure.”（Lass 1997: 320）

[114] よく知られた例に，孤立語，膠着語，屈折語という類型論的概念をダーウィン的進化論に結びつけ，言語は「孤立語＞膠着語＞屈折語」の順に変化するとして，屈折語から孤立語への変化を言語の堕落とみなしたかつての偏見が挙げられる。

[115] 第 19 節で述べるアフリカーンス語の形容詞語尾 -e を扱った論考は含まれていない。

② 本来の弱変化動詞：ｱﾌ werk/オ *werken*/英 *work*「働く」

ｱﾌ werk—hy/ons werk—hy/ons het gewerk

オ *werken—hij werkt/wij werken—*{*hij werkte/wij werkten ~ hy heeft gewerkt/wij hebben gewerkt*}

英 *work—he works/we work—* {*he/we worked ~ he has/we have worked*}

人称代名詞を除く格変化と名詞の性も失われ，不定冠詞は ’n [ə]/[ən]，定冠詞は die だけである。とくに性の消失は，英語と並んで印欧語全体でも珍しい[116]。初期中英語（Early Middle English 1150–1300）の時代に性を失った英語では，1500 年頃までに形容詞語尾が完全に消失した（荒木/宇賀治 1984：187）。しかし，アフリカーンス語の形容詞は強・弱変化の区別を失ったが，限定用法の語尾は保持している。それはオランダ語や西フリジア語と同じ -e [ə]の 1 種類だが，この統一語尾の有無は，両言語と違って限定詞の有無と種類，単数・複数の区別という統語的条件とは無関係に，形容詞の形態音韻論的条件による。その条件はかなり複雑である[117]。清水（2018： 6 ）で述べたように，印欧語の形容詞は性から自由な点で名詞から区別され，その語形変化は統語的な一致（英 agreement/concord）に依存している。この原則から逸脱したアフリカーンス語の形容詞語尾 -e は，きわめて特殊である。

まず，限定用法の形容詞が語尾 -e を伴うのは次の場合である。

---

[116] 両言語以外のゲルマン語では，デンマーク語西ユトラント方言（デ vestjysk）が標準デンマーク語の「両性/中性」という文法的な性の対立を解消して，「可算（デ numerale）/不可算（デ innumerale）」という意味的対立に移行させている（清水 1995：62–68）。印欧語全体では，アルメニア語やペルシャ語で性が消失している（清水 2019b：37–40）。

[117] この規則には揺れや例外がかなりある。条件に反して語尾 -e を伴うのは，比喩的意味（ｱﾌ diep***e*** eerbied，英 *deep respect*），感情的用法（ｱﾌ jou stout***e*** kind，英 *you naughty child*），慣用表現（ｱﾌ van kort***e*** duur「短命の」，オ *van kort**e** duur*），固有名詞（ｱﾌ die Grot***e*** Kerk「大聖堂」，オ *de Grot**e** Kerk*）でのオランダ語的な古形の残存などである（Raidt 1983: 142ff.，Donaldson 1993: 162ff.）。一方，独立用法で名詞的に用いると，つねに語尾 -e を伴う（ｱﾌ {’n/die/hierdie/my} grot***e***，英 {*a/the/this/my*} *big one*）。

(1) 語尾 -e を伴う場合：例 gelukkig「幸運な」, goed「良い」

単数	アフ	{'n/die}	{gelukkig***e***/goe***ie***} {man/vrou/kind}
		{a/the}	{lucky/good} {man/woman/child}
複数	アフ	{Ø/die}	{gelukkig***e***/goe***ie***} {manne/vroue/kinders}
		{Ø/the}	{lucky/good} {men/women/children}

① 多音節の形容詞（接尾辞・接頭辞を伴う派生語や複合語を含む。-er [ər]/(-el [əl])で終わる語と比較級 -er [ər]は除く）

アフ gelukkig [xəˈlœkəx]—gelukkig***e*** [xəˈlœkəxə]（接尾辞 -ig, オ *gelukkig* [ɣəˈlʏkəx]—*gelukkig**e*** [ɣəˈlʏkəɣə], 英 *lucky, happy*）

アフ konkreet [kɔŋˈkreət, kɔŋˈkre:t]—konkret***e*** [kɔŋˈkreətə, kɔŋˈkre:tə]（オ *concreet* [kɔŋˈkre·t]—*concret**e*** [kɔŋˈkre·tə], 英 *concrete*）

② 1音節の形容詞で語幹が交替する語

a) 音節末音の無声化：閉鎖音 /d/→[t], 摩擦音 /v/→[f]

アフ vreem***d*** [freəmt, fre:mt]—vreem***de*** [ˈfreəmdə, ˈfre:mdə]（オ *vreemd* [vre·mt]—*vreemd**e*** [ˈvre·mdə], 英 *foreign*）

アフ gla***d*** [xlat]—gla***dde*** [ˈxladə]（オ *glad* [ɣlɑt]—*gladd**e*** [ˈɣlɑdə], 英 *smooth, slippery*）

アフ do***f*** [dɔf]—do***wwe*** [ˈdɔvə]（比較：オ *dof* [dɔf]—*doff**e*** [ˈdɔfə], 英 *dull, faint*）

アフ doo***f*** [doəf, do:f]—do***we*** [ˈdoəvə, ˈdo:və]（オ *doof* [do·f]—*dov**e*** [ˈdo·və], 英 *deaf*）

b) 母音間での語中音脱落（英 medial syncope）

V＋{[d]/[x]}＋e [ə]→ V＋{[ゼロ]（→[j]わたり音）/[ゼロ]}＋e [ə]

アフ goe***d*** [xut]—goei***e*** ([ˈxuə]→) [ˈxujə]（オ *goed* [ɣu·t]—*goed**e*** [ˈɣu·də]/*goei**e*** [ˈɣu·jə], 英 *good*）

アフ kou***d*** [kœut]—kou***e*** [ˈkœuə]（オ *koud* [kɔut]—*koud**e*** [ˈkɔudə, ˈkɔu(ʊ)ə], 英 *cold*）

アフ laa***g*** [lɑ:x]—la***e*** [ˈlɑ:ə]（オ *laag* [la·x]—*lag**e*** [ˈla·ɣə], 英 *low*）

c) 語末音子音群（英 consonant cluster）の簡素化

{st [st]/sk [sk]/gt [xt]}＋[ə]→{s [s]/s [s]/g [x]}＋ゼロ[118]

アフ　jui***s*** [jœis]—jui***ste*** [ˈjœistə]（オ *juist* [jœyst]—*juist**e*** [ˈjœystə]，英 *just, correct*）

アフ　perfe***k*** [pərˈfɛk, pɛrˈfɛk]—perfe***kte*** [pərˈfɛktə, pɛrˈfɛktə]（オ *perfect* [pɛrˈfɛkt]—*perfect**e*** [pɛrˈfɛktə]，英 *perfect*）

アフ　li***g*** [lïx]—li***gte*** [ˈlïxtə]（オ *licht* [lɪxt]—*licht**e*** [ˈlɪxtə]，英 *light*）

一方，限定用法の形容詞が語尾 -e を伴わないのは，次の場合である。

（2）ゼロ語尾（-Ø）の場合：例 groot「大きい，大柄な」

単数	アフ	{'n/die}	{groot-***Ø***/groter-***Ø***}	{man/vrou/kind}
		{a/the}	{great（＝tall)/greater（＝taller)}	{man/woman/child}
複数	アフ	{Ø/die}	{groot-***Ø***/groter-***Ø***}	{manne/vroue/kinders}
		{Ø/the}	{great（＝tall)/greater（＝taller)}	{men/women/children}

① 1 音節の形容詞で，(1)②の子音以外（無声閉鎖音 p [p]/t [t](/t/)/k [k][119]，鳴音 m [m]/n [n]，流音 l [l]/r [r]）または母音で終わる語

アフ　diep（オ *diep*，英 *deep*），groot（オ *groot*，英 *great (＝tall)*），アフ　ryk（オ *rijk*，英 *rich*），warm（オ *warm*，英 *warm*），アフ bruin（オ *bruin*，英 *brown*），アフ geel（オ *geel*，英 *yellow*），アフ duur（オ *duur*，英 *dear*），アフ blou（オ *blauw*，英 *blue*），アフ vry（オ *vrij*，英 *free*）

② -er [ər]/(-el [əl])で終わる多音節の形容詞（比較級 -er [ər]を含む）[120]

---

[118] このほかに，語末音の交替に語尾 -e のなごりをとどめる少数の例がある：アフ lan***k*** [laŋk]—lan***g*** [laŋ]（オ *lang* [lɑŋ]—*lang**e*** [ˈlɑŋə]，英 *long*），*ou**d*** [ɔut]—*ou* [ɔu]（オ *oud* [ɔut]—*oud**e*** [ˈɔudə, ˈɔu(ʊ)ə]，英 *old*）。

[119] 子音 -s [s]で終わる形容詞には，語尾 -e を伴わない例も少なくない（アフ wys—wys***e***（オ *wijs—wijze*，英 *wise*）↔grys—grys-***Ø***（オ *grijs—grijze*，英 *gray*））。その他の例外もある（(1)②(b) アフ stu***g*** [stœx]—stu***gge*** [ˈstœxə]（オ *stug* [stʏx]—*stugg**e*** [ˈstʏɣə]，英 *stiff, stubborn*）；stre***ng*** [strɛŋ] —stre***nge*** [ˈstrɛŋə]（オ *streng* [strɛŋ] —*streng**e*** [ˈstrɛŋə]，英 *strict*））↔アフ ba***ng*** [baŋ]—ba***ng-Ø*** [baŋ]（オ *bang* [bɑŋ]—*bang**e*** [ˈbɑŋə]，英 *afraid*）；アフ nuu***t*** [nyt]—nu***we*** [ˈnyvə]（オ *nieuw* [ni·u]—*nieuw**e*** [ˈni·ʊə]，英 *new*））。

アフ　bitter（オ *bitter*，英 *bitter*），dubbel（オ *dubbel*，英 *double*）
アフ　groter（←groot 比較級，オ *groter*←*groot*，英 *greater (= taller)*）

「黄金の世紀」と言われる 17 世紀のオランダ語は，両性（de）と中性（het）の 2 性に簡素化されていた。限定用法の形容詞語尾は性と限定詞の種類に依存して -(e)/-e/-e(r)/-en だったが，当時の文法家（オ grammatici）が定めた規範による書き言葉に限られ，地域的・社会的異同が激しかった（De Korne/Rinkel 1987: 31）。話し言葉では人称代名詞を除いて格変化が失われ，無アクセントの -en［ən］の -n は脱落する傾向にあった。したがって，慣用句などでの属格と与格の残存を除けば，現代オランダ語と同様に，中性単数不定はゼロ語尾，それ以外は語尾 -e が基本だった（Lass 1990: 89f.）。

Raidt（1968）（1983: 148–154）によれば，ケープタウンを中心とするオランダ人入植地では，非オランダ語話者がオランダ語を習得する過程で 17 世紀末頃から混乱が生じた。1700 年頃の文献からは，オランダ語から逸脱した形容詞有語尾形とゼロ語尾形のそれぞれの拡大傾向がうかがえる。そして，ケープタウン植民地の話し言葉，すなわち初期アフリカーンス語（ケープタウン・オランダ語，アフ Kaapse Nederlands 1652–1750）の末期にあたる 1740 年頃までに，名詞の性が消失した（Raidt 1983: 149）。その結果，形容詞語尾の使用に決定的な混乱が生じ，ゼロ語尾と語尾 -e の区別が不明になった。これが Lass（1990）の言う「がらくた段階」（'junk' stage, ib. 90）にあたる。

een kleyn-***e*** harpoen（両性）↔　een kleyn-***Ø*** stuk（中性）
a　small-COMMON harpoon　　a small-NEUT piece
→　性の消失：een {kleyn-***Ø***/kleyn-***e***} harpoen～een {kleyn-***Ø***/kleyn-***e***} stuk
　　a　small　harpoon　a　small　piece
（Lass 1990: 91 変更）

[120] -el［əl］で終わる形容詞には異同がある。Donaldson（1993: 164）はゼロ語尾，Raidt（1983: 145）は有語尾またはゼロ語尾で，有語尾の頻度が高いとしている。

その後，形容詞の語形に応じて種々の段階を経て，形容詞語尾 -e の使用規則は 1775 年頃までに大枠で定着し（Raidt 1968: 82, 1983: 154），19 世紀に及んだ少数の例を除いて，ほぼ現在の形に至ったとされている。

この語尾 -e の付加には，語幹末子音の復元が関係している（アフ li***g***—li***gte***（オ *licht—lichte*，英 *light*），アフ jui***s***—jui***ste***（オ *juist—juiste*，英 *just*））。これは音節末（英 coda）の子音連続に制約が課されて，最終子音が脱落し，単子音に簡素化された結果である。語尾 -e の付加によって異なる音節に分かれ，この制約を免れた子音連続が保持されて，予測不可能な語幹の交替が生じるに至った。性の消失を始め，大規模な形態的簡素化を被ったアフリカーンス語は，限定詞の種類と有無による統語的条件が関与せず，形容詞の語形自体に依存する語尾 -e の付加という，ゲルマン語として類例のない規則を発達させた。そして，新たな形態的複雑化を招来したのである。

統一語尾 -e の役割は大別して 2 つある。ひとつは，(1)②で述べた語幹交替の保持である。これは，一部の名詞の単数形と複数形の関係にも認められる。一方，形容詞では，限定用法と叙述用法の語幹の相違として現れる。

① -s—-st
　形容詞　：叙述用法の語幹　アフ va***s***—限定用法の語幹 va***ste***（オ *vast—vaste*，英 *firm*，*fast*）
　↔名詞　：単数形　アフ ga***s***—複数形 ga***ste***（オ *gast—gaste**n***，英 *guest—guests*）
② -k—-kt
　形容詞　アフ eksa***k***—eksa***kte***（オ *exact—exacte*，英 *exact*）
　↔名詞　アフ konta***k***—konta***kte***（オ *contact—contacte**n***，英 *contact—contacts*）
③ 短母音＋-g—短母音＋-gt
　形容詞　アフ sle***g***—sle***gte***（オ *slegt—slegte*，英 *bad*）
　↔名詞　アフ re***g***—re***gte***（オ *recht—rechte**n***，英 *right—rights*）
④ 長母音/二重母音＋g—長母音/二重母音

形容詞　ｱﾌ droo***g***—dro***ë***（オ *droog—droge*，英 *dry*）
↔名詞　ｱﾌ oo***g***—o***ë***（オ *oog—ogen*，英 *eye*）
形容詞　ｱﾌ rui***g*** [rœix]—rui***e*** [ˈrœiə]（オ *ruig—ruige*，英 *rough*）
[↔名詞　ｱﾌ bru***g*** [brœx]—brû***e*** [ˈbrœːə]（オ *brug—brugge*，
英 *bridge—bridges*）]

Lass（1990: 88–95）は，これを形容詞の屈折語尾が強・弱変化による定・不定の区別から，語幹の異形態（英 stem allomorphy）の保持手段に転換した外適応とみなしている。Norde（2009: 115–117），Booij（2010: 213f.）にもこれを支持する言及がある。すなわち，これは「異形態を最大化しようとする変化の明確なケース」（“a clear case of change to MAXIMIZE allomorphy”, Lass 1990: 94）であり，以下の原文のように，この場合の外適応は，「以前の構造から引き継ぎ，かつて統語的に制御されていた -e を純粋に『局所的』に形容詞のクラスの標識として利用して，屈折誘因要素を形容詞自体の内部へと『内在化』ないし『内向化』したこと」にあるという。そして，「屈折的局所性が統語部門から語彙部門に推移した」と結論づけている。

> “The exaptation here is the ‘internalization’ or ‘introjection’ into the adjective itself of the inflectional triggers, using the inherited, formerly syntactically controlled *-e* purely ‘locally’, as a marker of adjectival class. Globally, one could say that the inflectional locus has shifted from syntax to lexicon.”（Lass 1990: 95）

しかし，これは言語変化のプロセスを客観的に言い換えたにすぎず，その構造的要因に言及したものではない。名詞の場合には，単数と複数という数の区別を明示する必要性があり，その結果として，語尾 -e の有無による語幹の異形態が生じたことは明らかである。しかし，形容詞語尾 -e の有無による語幹の異形態がどのような必要性から生じたかについては，何も述べられていない。本来の形容詞の屈折要素 -e の付加が統語的条件から語彙的特性

に移行した理由の説明としては，まったく不十分である。

形容詞語尾 -e の本質的な役割は，第 6 節で述べたドイツ語の形容詞弱変化語尾 -e/-en と同様に，「形容詞＋名詞」のまとまりを形態的に明示するシンタグマ表示にあると筆者は考える。その証拠として，まず，(2)①で示した一部の 1 音節形容詞のように，名詞への距離が短い場合にはゼロ語尾だが，多音節語になって距離が長くなると，語尾 -e が現れる。また，同じく(2)①で示したように，無声閉鎖音 p/t/k，鼻音 m/n，流音 l/r で終わる語は，1 音節語では語尾 -e が現れないが，接頭辞（ｱﾌ -rik/-baar など）や接尾辞（ｱﾌ be-/ge- など）による派生語を含んだ多音節語では，語尾 -e が現れる。

ｱﾌ　belangrik—belangrik***e***「重要な」（オ *belangrijk*）
ｱﾌ　privaat—privat***e***「個人の，私的な」（オ *privaat*）
ｱﾌ　gemeen—gemen***e***「公共・共通の，卑俗な」（オ *gemeen*）
ｱﾌ　agbaar—agbar***e***「尊敬すべき，立派な」（オ *achtbaar*）

さらに，注 118 で述べた語末音の交替に語尾 -e のなごりをとどめる少数の例（-nk [ŋk]→-ng [ŋ]，-oud [ɔut]→-ou [ɔu]）でも，やはり複合語・派生語で多音節語になると，語尾 -e が現れる[121]。

ｱﾌ　lan***k*** [laŋk]—la***ng*** [laŋ]（オ *lang* [lɑŋ]—*lang**e*** [ˈlɑŋə]，英 *long*）
↔ｱﾌ　lewenslan***k***—lewenslan***ge***（オ *levenslang—levenslang**e***，英 *lifelong*）
ｱﾌ　ou***d*** [ɔut]—ou [ɔu]（オ *oud* [ɔut]—*oud**e*** [ˈɔudə, ˈɔu(ʊ)ə]，英 *old*）
↔ｱﾌ　oerou***d***—oerou***e***（オ *oeroud—oeroud**e***，英 *very old*／ド *uralt*）

一方，上記の(2)②で述べたように，-er/(-el)で終わる多音節形容詞（例

[121] ただし，語尾 -e を伴わない 1 音節形容詞は，性質の強調や色彩の程度を表す前半成分を付加した複合語で多音節になっても，ゼロ語尾である：ｱﾌ klein-***Ø***—piepklein-***Ø***（オ klein—piepklein，英 *smaal—tiny*），ｱﾌ blou-***Ø***—ligblou-***Ø***（オ blauw—lichtblauw，英 *blue—light blue*）（Donaldson 1993: 164, 180–183）。これは筆者の主張への反例になる。

bitter/dubbel，英 *bitter/double*）には語尾 -e がつかないか，またはつきにくい。その理由は，あいまい母音 e［ə］が母音に近い流音をはさんで連続し，無アクセントの音節数が増えるのを嫌うという音韻的原則によると筆者は考える。同じ理由で，アフリカーンス語ではオランダ語よりも明確に，-er/-el で終わる名詞の複数形は多数派の語尾 -e（オ -en）ではなく，少数派の語尾 -s を伴う傾向が強い（Van Haeringen 1962[2]（1947）: 191，例 アフ kind***ers***↔オ kind***eren***←kind，英 *children*←*child*）。これは一般に「強弱格の原則」（英 trochaic principle）として知られている（Booij 2019[2]: 20，Hoekstra 2018: 44）（アフ dogt***er***—dogt***ers***，na***el***—na***els***；オ *dochter*—*dochters*，*nadel*—*nadels*；英 *daughter—daughters, nail—nails*）。

英語では，初期中英語（1150～1300）の時代に形容詞語尾が性・格による区別を失い，主として子音で終わる 1 音節語について，強変化で「単数：ゼロ語尾 -Ø」↔「複数：語尾 -e［ə］」の区別だけになった（Mustanoja 1959: 276）。単数のゼロ語尾は古英語の強変化単数主格ゼロ語尾の拡大であり，複数の語尾 -e は古英語の強変化複数主・対格語尾 -e の拡大による。これは，格変化の衰退に伴う形容詞語尾 -e の数の区別への外適応と言える。しかし，後期中英語（Late Middle English 1300～1500）になると，弱変化は単数・複数ともに語尾 -e を伴い，強変化でのみ「単数：ゼロ語尾 -Ø」↔「複数：語尾 -e［ə］」の区別が保たれるのが一般的になった。ただし，-e［ə］で終わる形容詞では -e を重ねない（中尾 1972：144f.）（good-（英 *good*），swete（英 *sweet*））。

		弱変化		強変化		
中英	単数	good-e	swete	good	swete	
	複数	good-e	swete	good-e	swete	（中尾 1972：145 変更）

そして，上述のように，1500 年までに語末音 -e［ə］の消失が一般化して，形容詞語尾は完全に消失した（荒木/宇賀治 1984：187）。

一方，アフリカーンス語の形容詞は，完全な脱屈折化（英 deflection）によるゼロ語尾形への選択肢を取らず，形態的複雑化を招きながらも，有語尾形

を保つ方向に発達した。これには，脱文法化の過程で，第 6 節で述べたドイツ語の弱変化語尾 -e/-en にも端的に見られるように，語尾 -e を名詞句の形態的なシンタグマ表示の役割に転用し，それをさらに推し進める外適応の力が作用したと筆者は考える。Lass（1990: 88–95）の主張する語幹の異形態交替の保持は，その結果の具体的反映とみなすべきである[122]。

ゲルマン祖語は，限定の意味を表していた語形成手段としての名詞の「n-語幹」を形容詞の語形変化に拡張し，強変化に対する弱変化として文法化した。その後，限定の意味が指示代名詞とそれから発達した定冠詞を中心とする限定詞に移行するにつれて，古今のゲルマン諸語で強・弱変化の脱文法化が進行した。その結果，ドイツ語では，弱変化語尾は名詞句内での平行表示の回避手段として，形容詞と名詞をつなぐ「テープ」の役割に転用され，性・数・格の形態表示に関与する強変化語尾とともに保持された。一方，語末音 -n が脱落し，格変化の消失に続いて性を失ったアフリカーンス語では，強・弱変化の区別だけでなく，残る唯一の形容詞語尾 -e の付加に対する統語的条件が失われた。そこで，アフリカーンス語は，英語のように形容詞を完全にゼロ語尾化することなく，外適応によって語尾 -e を名詞句のシンタグマ表示の形態的手段へと転換し，形容詞自体の形態音韻論的条件に従って付加することで，統一語尾 -e の脱文法化を徹底させたのである。

20. まとめ

本稿では，形容詞の強・弱変化をめぐって，ゲルマン祖語から古ゲルマン諸語への変遷を解説した後に，代表的な現代語と方言を取り上げて考察した。

まず，第 3 ～ 5 節では，ゲルマン祖語における強・弱変化の文法化から脱

[122] なお，Lass（1990: 94）では，アフ 'n ***enkel*** man（英 *a solitary man*）↔'n ***enkele*** man（英 *a single (unmarried) man*）の区別を「周辺的な意味的外適応」（'a marginal semantic exaptation', ib. 94）とみなしている。Booij（2010: 214）もこの説明を紹介し，オランダ語から，オ een ***goed*** vader「良き（＝父親の義務を果たす模範的な）父親」↔een ***goede*** vader「善良な父親；良き（＝父親の義務を果たす模範的な）父親」の例を挙げている。

文法化の開始について概観した。ゲルマン諸語の形容詞弱変化の文法化は，名詞句に「定」（英 definite）の形態表示を求めた発達の一環としてとらえられる。ゲルマン祖語は，名詞の語形成手段としての n–語幹から，名詞句の定の表現手段として弱変化を形容詞の形態範疇へと文法化し，「不定」（英 indefinite）の意味を表す強変化と区別するようになった。しかし，指示代名詞から定冠詞が発達するにつれて，この棲み分けは薄れ，中世期の古語の時代には，形容詞変化は限定詞とともに名詞の性・数・格の表示手段としての性格を強めていった。なお，人間・動物名詞を主要タイプとする現代ドイツ語の弱変化男性名詞は，個別化・限定の意味を持つ n–語幹名詞に由来する弱変化の外適応であり，脱文法化の一例と言える。

それ以降は，現代ゲルマン語を中心に脱文法化の諸相をたどった。まず，第 6 節では，ドイツ語の形容詞弱変化の特徴を平行表示の回避による階層表示の発達とシンタグマ表示の観点から分析し，第 7 節ではドイツ語の名詞枠の形成との関連について考察した。

第 8 節では，古ゲルマン諸語の n の脱落を確認し，第 9 〜10 節では，弱変化語尾が一律に語末音 -n の脱落を被った北ゲルマン語について，保守的な離島北ゲルマン語と革新的な大陸北ゲルマン語に分けて検討した。離島ゲルマン語に属するアイスランド語とフェーロー語では，限定用法の形容詞に強・弱変化の区別が明確に保たれている。フェーロー語と大陸北ゲルマン語（デンマーク語を除く）の前置詞定冠詞と後置定冠詞による二重限定（ス ***den*** goda mann***en***）は，名詞句の新たなシンタグマ表示の手段と言える。

その後は，類型論的により複雑な西ゲルマン諸語の検討に移った。まず，第 11 節では，ルクセンブルク語を取り上げた。同言語では，語末音 -n の脱落が共時的な音韻規則としてはたらき，強・弱変化の区別をほとんど失って，統合変化と平行表示を発達させている。類例として，第 12 節では，統一変化と平行表示を発達させたイディッシュ語，第 13 節では，弱変化を解消して平行表示を進展させた中期オランダ語を紹介した。強変化語尾の重複による性・数・格の二重表示の手間を省くドイツ語などの階層表示（ド ein***er*** gut***en*** Frau 女性単数与格）と，同一語尾の反復によって異なる語尾の使い分けの複

雑さを回避するルクセンブルク語などの平行表示（ル eng***er*** gudd***er*** Fra 女性単数与格）は，ともに言語経済性の原理に即していると言える。

第 14 節では，語末音 -n の脱落と復元をめぐって，ペンシルヴェニアドイツ語に言及した。15 節では，語末音 -n の脱落が語源的に無縁の語彙にも及び，逆に，語末音 -n の挿入を名詞句内部以外にも母音連続の回避手段として発達させたスイスドイツ語チューリヒ方言とベルン方言に言及した。

それ以降は，形容詞変化の形態的簡素化を経た北海ゲルマン語の後裔とオランダ語を扱った。第 16 章では，形容詞変化に有語尾形と並んで，英語と同様のゼロ語尾形のパターンが併存する低地ドイツ語について，北低地ザクセン方言を中心に，有語尾の保持を高地ドイツ語の影響と関連づけて考察した。大幅な簡素化を被った現代オランダ語と西フリジア語を論じた第 17 節に続いて，第 18 節では，次節の理解の前提となる文法化，脱文法化，外適応の概念について説明した。そして，第 19 節では，17 世紀半ばのオランダ語から発達したアフリカーンス語を取り上げた。アフリカーンス語は，文法性の消失に伴って強・弱変化の区別を失ったが，同じく性を失った英語の形容詞が完全な脱屈折化を経て無変化になったのに対して，形容詞の統一語尾 -e を保持している。しかもゲルマン語としてまったく例外的に，アフリカーンス語では，統語的条件と無関係に形容詞自体の形態音韻論的条件に従って，語尾 -e を付加する。この事実について，Lass（1990）の主張とは異なり，ドイツ語などに見られる名詞句の形態的シンタグマ表示の役割をさらに強めた外適応の一例として説明した。

本稿で得られた知見は，次の 3 つの類型論的指標によって総括される。

① 語末音 -n の脱落

弱変化を特徴づける子音 n は語末で脱落しやすく，北ゲルマン語では一律に起こり，一部の西ゲルマン語にも見られる。これは，形容詞強・弱変化の脱文法化を助長する要因になったと推察される。まず，北ゲルマン語については，語末音 -n の脱落の結果，保守的な離島北ゲルマン語では，弱変化語尾が母音 -i/-a/-u で特徴づけられるようになり，強変化語尾から区別される。

一方，形態的簡素化が進行した大陸北ゲルマン語では，弱変化語尾は母音 -e または -a に縮約されている。次に，西ゲルマン語については，オランダ語と西フリジア語で限定用法の形容詞語尾が n を欠く -e [ə] だけに簡素化している。これに対して，語末音 -n の脱落が後続音の種類によって条件づけられる西ゲルマン語も多い。アイフェル規則を有するルクセンブルク語はこの点で典型的な例だが，語源的に根拠のない単語間の n の挿入も，母音連続を回避する場合に一部で観察される。スイスドイツ語チューリヒ方言とベルン方言では，この種の n の挿入が広く母音連続の回避手段として再解釈され，一部の機能語では母音連続の回避とは無関係な異形態を生んでいる。

② 強・弱変化の区別，階層表示と平行表示

ドイツ語は，強変化と弱変化の区別を保持しながら，限定詞によって名詞句を形態表示する単一変化に大幅に移行しており，混合変化の発達が示すように，限定詞と形容詞の同一語尾を避ける階層表示（ド ein***er*** gut***en*** Frau 女性単数与格）を発達させている。しかし，これだけが言語経済性の原理にかなっているわけではなく，西ゲルマン語には逆のパターンも存在する。たとえば，ルクセンブルク語，イディッシュ語，古くは中期オランダ語では，強変化と弱変化の明確な使い分けが失われる傾向を示し，限定詞と形容詞が同一語尾を反復させる重複変化が支配的である。限定詞と形容詞が主として強変化による同一語尾を伴うこの 3 言語での平行表示（ル eng***er*** gudd***er*** Fra 女性単数与格）の発達は，異なる語尾を使い分ける手間を省く点で，ドイツ語とは別の意味で言語経済性の原理にかなっている。階層表示と平行表示は，ともに言語経済性の原理の実現形式と言える。

③ シンタグマ表示

階層表示に移行したドイツ語の形容詞変化では，強変化語尾と並んで，形態表示への貢献は低いものの，弱変化語尾が一貫して名詞句のシンタグマ表示としての役割を担っている。フェーロー語と大陸北ゲルマン語（デンマーク語を除く）の前置詞定冠詞と後置定冠詞による二重限定は，新たなシンタ

グマ表示の手段と言える。一方，低地ドイツ語では，限定用法の形容詞に，有語尾形と並んで，北海ゲルマン語特徴を受け継ぐゼロ語尾形が広く併存している。同じく北海ゲルマン語から発達した英語では，名詞句の格に続いて性の消失を経て，限定用法の形容詞が完全にゼロ語尾になった。一方，オランダ語は北海ゲルマン語の後裔である西フリジア語と同様に，広範な形態的簡素化を被り，形容詞語尾は -e の 1 種類に簡素化されている。ところが，17 世紀半ば以降，オランダ語から発達したアフリカーンス語は，性の消失を始め，英語をしのぐ極端な形態的簡素化を経たものの，形容詞の統一語尾 -e を保っている。しかも，これは形容詞自体の形態音韻論的条件に従って付加される点で，ゲルマン語として類例がない。アフリカーンス語の統一語尾 -e は，形容詞の強・弱変化が脱文法化の過程で区別を失った結果，名詞句のシンタグマ表示の手段として外適応を遂げた例と言える。

以上の結果から各言語を特徴づけてまとめると，次のようになる。

離島北ゲルマン語 （アイスランド語，フェーロー語）	強・弱変化の保持（アイスランド語，フェーロー語） 二重限定によるシンタグマ表示（フェーロー語）
大陸北ゲルマン語 （スウェーデン語，デンマーク語，ノルウェー語ブークモール，ノルウェー語ニューノシュク）	二重限定によるシンタグマ表示（デンマーク語を除く）
ドイツ語 ルクセンブルク語	強・弱変化の保持と階層表示 アイフェル規則，強・弱変化の区別の消失傾向と平行表示
中期オランダ語，イディッシュ語	強・弱変化の区別の消失傾向と平行表示

スイスドイツ語 （ベルン方言，チューリヒ方言）	語末音 -n の脱落と挿入
低地ドイツ語 （北低地ザクセン方言など）	有語尾形とゼロ語尾形の併存
英語	形容詞語尾の全面的消失
オランダ語，西フリジア語	統一語尾 -e への簡素化
アフリカーンス語	形容詞の形態音韻論的条件による統一語尾 -e の付加とシンタグマ表示の強化

参考文献

荒木一雄／宇賀治正朋　1984『英語学体系 10–1　英語史 IIIA』大修館書店.

Besch, Werner et al. (Hrsg.). 1983. *Dialektologie. Halbbd. 2. HSK Bd. 1.* Berlin/New York: De Gruyter.

Booij, Geert. 2010. *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.

Booij, Geert. 2019[2]. *The Morphology of Dutch*. Oxford: Oxford University Press.

Buck, Carl Darling. 1933. *Comparative Grammar of Greek and Latin*. Chicago: University of Chicago Press.

De Korne, Annet/Rinkel, Tineke. 1987. *Cursus zestiende- en zeventiende-eeuws Nederlands*. Groningen: Wolters-Noordhoff.

Donaldson, Bruce C. 1993. *A Grammar of Afrikaans*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Durrell, Martin. 1990. Westphalian and Eastphalian. In Russ (ed.)1990. 59–90.

Goltz, Reinhard H./Walker, Alastair G. H. 1990. North Saxon. In Russ (ed.). 31–58.

Greenberg, Joseph H. 1991. The Last Stages of Grammatical Elements: Contractive and Expansive Desemanticization. In Traugott, Elizabeth Closs/Heine, Bernd (eds.) *Approaches to Grammaticalization. 2 vols*. Amsterdam: Benjamins.

Herrmann-Winter, Renate. 2006. *Hör- und Lernbuch für das Plattdeutsche*. Rostock: Hinstorff.

Hoekstra, Jarich. 2018. Frisian Genitives — From Old Frisian to the Modern Dialects. In: Ackermann, Tanja/Simon, Horst J./Zimmer, Christian (eds.). *Germanic Genitives*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.

Hopper, Paul J./Traugott, Elizabeth Closs. 2003[2] (1993). *Grammaticalization*. Cambridge:

Cambridge University Press.

Janda, Richard D. 1980. On the Decline of Declensional Systems — The Overall Loss of OE Nominal Case Inflections and the ME Reanalysis of *-es* as *his*. In: Traugott, C. Elizabeth et al. (eds.). *Papers from the 4th International Conference on Historical Linguistics*. Amsterdam: Benjamins. 243–252.

Keller, R. E. 1961. *German Dialects*. Manchester: Manchester University Press.

Kuhn, Hans 1964. Hannover und der grammatische Wechsel. *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 93. 13–18.

Lass, Roger. 1997. *Historical Linguistics and Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lehmann, Christian. 2015[3] (1982). *Thoughts on Grammaticalization*. Berlin: Language Science Press.

Lindow, Wolfgang et al. 1998. *Niederdeutsche Grammatik*. Leer: Schuster.

Lindow, Wolfgang. 1998[5]. *Plattdeutsch-hochdeutsches Wörterbuch*. Leer: Schuster.

Lipold, Günter. 1983. Adjektivische Deklinationssysteme in den deutschen Dialekten. In Besch et al. (Hrsg.). 1179–1195.

MAND I: De Schutter, Georges et al. 2005. *Morfologische atlas van de Nederlandse dialecten. Deel I*. Amsterdam: Amsterdam University Press.

Meyer, Gustav Friedrich. 1983[2] (1923). *Unsere plattdeutsche Muttersprache*. St. Peter-Ording: Lühr & Dircks.

Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax I. Parts of Speech*. Helsinki: Société Néophilologique.

中尾俊夫　1972『英語学大系 9　英語史Ⅱ』大修館書店.

Niebaum, Hermann. 1983[2]. Zur Formengeographie. In: Goossens, Jan (Hrsg.). *Niederdeutsch. Sprache und Literatur. Eine Einführung. Band 1 — Sprache*. Neumünster: Wachholtz. 158–174.

Norde, Muriel. 2011. Degrammaticalization. In: Narrog, Heiko/Heine, Bernd (eds.). *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press. 475–487.

Norde, Muriel/Van de Velde, Freek (eds.) 2016. *Exaptation and Language Change*. Amsterdam: Benjamins.

Panzer, Baldur. 1983. Formenneutralisation in den Flexionssystemen deutscher Dialekte. In: Besch et al. (Hrsg.). 1170–1173.

Raidt, Edith H. 1968. Ontwikkelingsgang van die Afrikaanse byvoeglike verbuiging. In: Raidt, Edith H. 2001. *Historiese taalkunde — Studies oor die geskiedenis van Afrikaans*. Johannesburg: Witwatersrand University Press. 72–87.

Raidt, Edith H. 1983. *Einführung in Geschichte und Struktur des Afrikaans*. Darmstadt:

Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Russ, Charles V. J. (ed.). 1990. *The Dialects of Modern German*. London: Routledge.

Schirmunski, V. M. 2010 (1962). *Deutsche Mundartkunde*. (übers. von Wolfgang Fleischer) Frankfurt a. M. et al.: Lang.

Schönfeld, Helmut. 1990. East Low German. In: Russ (ed.). 91–135.

清水　誠　2018「ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達（1）―ゴート語，ドイツ語，北ゲルマン語―」『北海道大学文学研究科紀要』155. 1–54.

清水　誠　2019a「ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達（2）―西ゲルマン語（1）―」『北海道大学文学研究科紀要』156. 1–35.

清水　誠　2019b「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係―」『北海道大学文学研究院紀要』158. 37–76.

Thies, Heinrich. 2010[2]. *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster: Wachholtz.

Van Haeringen, C. B. 1962[2] (1947). Naamvallen bij eigennamen van personen en bij verwantschapsnamen. In: *Neerlandica — Verspreide opstellen door C. B. Van Haeringen*. Den Haag: Daamen N. V.

＊本研究は科研費（19K00540）の助成によるものである。